

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 樋渡雅人

論文題目 「ウズベキスタンにおける慣習経済の機能と役割
- アンディジャン州におけるマハッラの共同体像と社会的紐帯 - 」

旧社会主義国における社会経済発展を考察する場合、果たして、それを単に「命令経済」(command economy)から「市場経済」(market economy)への移行として捉えるだけでよいのであろうか。その地域には、人々が嘗々と築き上げてきた「慣習経済」(customary economy)が存在するはずであり、それは経済発展において大いに活用しうる豊かな資源として捉えることができるのではないだろうか。

樋渡雅人氏の博士学位請求論文「ウズベキスタンにおける慣習経済の機能と役割：アンディジャン州におけるマハッラの共同体像と社会的紐帯」は、このような問題意識から、旧ソ連中央アジアの市場移行国であるウズベキスタンを対象に、移行期の経済的苦境の中で「慣習経済」の担ってきた積極的な機能をあきらかにし、基盤となる構造を「マハッラ」と呼ばれる地縁集団(locality)の実態調査を通して検討することを目的としてなされた研究である。ここで、マハッラとは、イスラーム圏の諸国における都市生活の基本的な単位(街区)であるが、近年、同国政府は、マハッラの復興を標榜し、これを政策に取り込むことによって開発を進めようとしている。マハッラの分析は政策論においても、大きな意義を有するといえよう。

この課題を達成するため、著者は、大規模な個票データを用いた定量分析と、参与観察と質問票調査からなる実態調査を繰り返し実施することによって得られた一次資料を用いた定性分析の両面から、厳密な論証を行い、注目に値すべき分析結果をあげてきた。この研究は、資料的な制約ゆえにこれまでその実態が必ずしもあきらかでなかった中央アジアの慣習経済に関して、さまざまな新しい事実の発掘と新しい視点の提示に成功している。その内容は以下の通りである。

まず、第1章において、著者は、近年のウズベキスタンの経済社会的状況を概観した上で、その社会に内在する固有の互酬ネットワークが経済危機下において社会保障機能を果たしていることを、二段階回帰分析を用いた厳密な計量分析によって丁寧に示した。すなわち、経済の最も落ち込んだ時期である1995年に同国で実施された1500世帯余りの家計調査の個票データを用いて、私的資源移転(private transfer)が一時的な所得ショックを補填する所得再分配機能が実現されていることを検証したのである。さらに、親族間移転と隣人間移転に焦点を当てた拡張的な分析からは、血縁・地縁的紐帯の重要性が示唆された。

しかし、集計データによる計量分析だけでは、大まかな社会保障機能の存在を確認することはできても、そこに内在するメカニズムを実体的に把握することは困難である。この問題を解決するために、著者は、計4回、のべ5ヶ月以上にわたる実態調査を試み、ウズベキスタンにおける慣習経済の構造を解明しようとした。第2章では、実態調査による本格的分析の準備として、同国におけるマハッラの歴史、政治、社会などを扱った諸議論を幅広く批判的に展望し、従来の議論では十分に解明されてこなかった3つの論点を、「下からの」構造分析と名付けた独自のマハッラ分析の課題として抽出した。すなわち、(1)慣習経済の社会保障機能の源泉とその構造を具体的現実には照らして検証するために、マハッラにおける相互扶助のありようを示すこと、(2)「下からの」観点、すなわち、単に行政の末端組織としてではなく、住民の視点からマハッラの共同体像を示すこと、(3)従来の開発政策議論が暗黙裡に想定してきた「明確な境界線」と「構成員の同質性」によって規定される「機能的共同体像」とは異なるウズベキスタンにおける共同体の固有性を示すことである。

これを受けて、残りの章では、これらの課題に答えるべく、アンディジャン州のマハッラの事例分析が展開される。第3章では、200年余りの歴史を有し、世帯数500を数える調査地「オフトバチェク・マハッラ」を題材として、家計調査、親族関係調査、ライフヒストリー調査等を著者が自ら実施し得た一次資料を詳細に分析することによって、様々な社会的紐帯が内部に錯綜し、機能的共同体の枠組みには合致し難い外観を呈するマハッラ固有の共同体像の実体が解明されている。たしかに、血縁集団や慣習「ギャブ」の実態を分析することによって析出されたマハッラ住民が保有する社会的紐帯は、明確な共同利害を有した「機能的」紐帯であった。しかし、参与観察と質問票調査によって、この紐帯は従来の機能的な共同体像に着目した分析では扱うことが困難な二つの固有の性質を有するという重要な事実発見が導かれる。すなわち、各世帯が複数の機能的紐帯のネットワークに所属することは容認され、住民間の人間関係は、これらのネットワークが、互いに溶解や融合するのではなく、幾重にも重なり合うことによって醸成されるという「重層性」と、これらの機能的紐帯は、必ずしもマハッラ内で完結していないという「横断性」である。それは、マハッラが、機能的紐帯が密に重なり合った「場」として存在しており、「曖昧な境界線」と「異質な構成員」を伴うという独特な性格を有する相互扶助の基盤としての共同体であることを示している。

しかしながら、従来の機能的な共同体分析では、このような特性を有するマハッラを十分に理解することができない。そこで、第4章では、相互に関連する3つの視角(有力者、家族儀礼、政策)からマハッラを再検討することによって、従来の共同体像を補完しつつ、新しい「マハッラの共同体像」を構築することが目指されている。まず、著者は、マハッラの有力者達に着目し、代表機関としてのマハッラ委員会の人事構成を詳しく検証することによって、マハッラの共同体像の中で、委員会はどのように位置付けられるのかを提示した。すなわち、各有力者は、各機能的紐帯によるネットワークの代表であるという点で、

互いに異質な利害集団に属しているという特徴が発見されたのである。さらに、トイと呼ばれる家族儀礼を参照し、マハツラにおける異質な有力者同士、異質なネットワーク同士の関係性が検討され、有力者同士は、直接的に強い機能的紐帯で結ばれていなくとも、「交点」としての個々の住民を仲介にして結ばれているという重要な事実発見が提示されている。「交点」となる住民は、不定期かつ頻繁に異質なネットワークの参集の場を提供する。つまり、機能的紐帯によるネットワークの重層性という基本構造の上において、「交点」としての個々の働きかけやトイ等の慣習を通して、マハツラという場に異質な者同士の頻繁な接触や擦り合わせが生じているとみなすことができるのである。最後に、近年のマハツラ政策を再考し、本論文の分析結果の政策的含意が考察されている。まず、個別主体単位の観点からは、個人や世帯をネットワークの中で捉えることの重要性が指摘され得る。とくに、ネットワークに漏れている世帯は、ネットワークの閉鎖性から、マハツラ委員会によっても救済されない可能性があるという指摘は重要な論点である。第二に、現在のウズベキスタンの政策は機能的共同体像としてマハツラを育成することを目指しており、著者が析出したマハツラの機能的紐帯の重層構造とは競合しうることが指摘されている。最後に、マハツラ政策には2つの方向性、すなわち、機能的共同体の育成を目指す道と、本論文の示した共同体像を活用する道があることが提示され、マハツラによって個別に使い分けることが、既存資源の有効利用につながるということが指摘されている。

以上が提出論文の要旨であるが、本論文は次のような点で高く評価することができる。まず、ウズベキスタンの膨大な家計データを本格的に利用し、適確な計量分析によって慣習経済の役割を開発経済学の視角からあきらかにした点である。それは、従来のこの種の研究において欠落していた検証の厳密性を補うものであり、ウズベキスタンにおける私的資源移転の社会保障機能が科学的に実証されたことを意味する。この意味で、本論文は同国の慣習経済の経済学的分析において重要な貢献をもたらしたと評価することができる。この部分については、査読付学術雑誌『アジア経済』において発表されており、開発経済学の分野において既に高い評価を得ている。

第二に、こうした一見、形式的に見える分析に留まらず、著者は、そこにおいて見逃されていた慣習経済の実体的構造について、地域研究の立場から、説得的な解明を成功させているといえよう。すなわち、現地語を駆使した長期の実態調査における詳細な参与観察によって得られた数々の貴重かつ重要な事実発見にもとづき、禁欲的な定性分析を展開し、きわめて資料的価値の高いモノグラフを完成させている。

第三に、これら二つの異なる視角からの研究は、決して分断された別個のものではなく、有機的に結合され、マハツラの共同体の構造の社会科学的解明に成功しているといえよう。多くの開発研究にあっては、定量分析と定性分析のリンクに弱く、分析の総合は容易ではないが、本論文は、開発経済学と地域研究を止揚する総合的開発研究として極めて高い水準の研究である。このような視角からの研究は、非社会主義諸国における発展途上地域の研究ではある程度の蓄積はあるものの、旧社会主義諸国の分析では稀であり、ウズベキス

タンをはじめとする中央アジアの場合は皆無であるといつてよい。その一部は、査読付学会誌『アジア研究』において公表されており、開発経済学のみならず、アジア地域研究の分野においても既に高い評価を得ている。

以上のように、本論文は、今後の移行経済を扱う諸分野に幅広く大きな貢献を果たした研究として高く評価できるであろう。

もちろん、本論文には改良の余地がないわけではない。第一に、本論文はマハラの共同体のいわばスナップ・ショットに過ぎない。この研究の守備範囲外とはいえ、慣習経済が、命令経済や市場経済との関係で、動態的な発展過程においてどのようにして変容してきたのか、あるいは現在の慣習経済はどこに位置づけられるのかという点が明確に解明されたとは言い難い。また、マハラの重層性と横断性という特徴が他のマハラにどれほど普遍性があるのかという問題も課題として残っている。これらの点については、今後、たとえば、社会ネットワーク分析などを用いた一層の研究の発展が望まれるところであろう。第二に、いくつかの細かい点において、より一層の具体的分析が望まれる箇所がある。たとえば、国際援助諸機関におけるマハラのとらえ方についてさらに詳しい論及があれば、それが国内のマハラ政策に与える影響という視点を与えるであろうし、市場経済化において具体的にマハラのネットワークがどのように活用されるのかをマハラ構成員の視角から論じることここでの主題の分析に一層の厚みをもたらすはずである。さらに、第4章のリーダーの分析において、彼らが帰属するネットワークにおけるリーダーの条件についての分析が平板になってしまっている。この点が補足されれば、リーダーを巡る分析はより説得的になったように思われる。第三に、用語や構成面についても若干の改善点が指摘されうる。たとえば、ウズベキスタンの慣習トイについての訳語（家族儀礼）などの術語については、読者の便を図り追加的説明が必要であろう。また、参考資料として巻末に掲げられた世帯別モノグラフも、それ自体が価値の高いきわめて有用な一次資料であるが、本論における参照箇所との対応は読者にとって親切とはいえず、公刊する際には改良が望まれる。

しかしながら、これらの点は本人も十分に認識しているところであり、また、上に述べた本論文の学術的価値をいささかも損なうものではない。本論文は、開発経済学と地域研究の相克を止揚する極めて高い水準の研究であり、関連学術諸分野において多大な貢献をした特筆に値する研究成果として評価することができる。以上の理由により、審査員は全員一致で、本論文の著者は課程博士（学術）の学位を授与されるにふさわしい水準にあると認定した。